

神津島の
お年より作文集

第二十集

神津島に金毘羅神社が
祀られた経緯と記録
石田 正一 (七九歳) 一頁

神津大好き！
浜川 喜久子 (八二歳) 十三頁

随想・句・川柳
稲葉 クニ子 (八三歳) 三九頁

やっぱり家(神津)
がいい
梅田 千代子 (八五歳) 五九頁

私のあゆんだ道
石野田 起基 (九〇歳) 七一頁

思ひ出
清水 滝一 (享年八一歳) 九三頁

神津島に金毘羅神社が祀られた

いきさつ（経緯）と記録

昭和九年十二月十日生 七十九歳

石 田 正 一 （つばきや）

本島に祀^{まつ}られている金毘羅^{こんびら}神社は、いつ頃どの様ないきさつ（経緯）で何方がお祀りされたのか、その記録は残されていないのが実情であります。

本村の史実を研究された、故山下彦一郎先生や、「神津島の神々」と題して執筆された、故松本一氏の文献の中でもその記録が見当たらないようであります。

私が小学生の頃、（七十年以上前）祖母から何回も聞き伝えられて



いたので、金毘羅神社に対しては関心があり、何とか調べることが出来ないものかと考えてはいましたが、前述したお二人の史実の中にも祀られた年代等については記されていないようですし、況^まして私のような浅学非才な者に調べる術も無いのが実情でした。

然^{しか}し私が祖母からの聞き伝えと言うのは次の様なことでした。

何時の頃だか知らない。

「昔なあー金毘羅様は漁師が七軒で祀つたらしくて、其の七軒の中に当家も含まれてゐるだあ」との伝えでした。

其の七軒でお祀りした理由はと言いますと、七軒のどこかで漁船を持っていて（櫓船でしょう）、その水夫（かこ）七人で漁をしていた、という事でした。

ある日の事、鯉^{かつお}漁かたび漁に出たのでは、と考えられます。操業中突風に遭遇して港に戻ることが出来なくなり時化^{しけ}の中何日も漂流し、船方全員が生きて妻子の待つ我が家に戻ることは出来ない状況だったとの言い伝えでした。



船方^{ふなかた}は悲愴^{ひそう}な思いで流れたものでしょう。祖母からの聞き伝えによると、時化の中、流れながら漁師が崇^{あが}める金毘羅大権現様^{だいこんげん}に救いを求めようと、祈りながら（七軒家族全員の意味）『救ってくださいれば、生きて家族のもとに生還^{せいかん}させてくだされば、金毘羅大権現様へ七人揃ってお礼参りにあがります。大権現様お助けて下さい頼みます』と祈りながら流れているうち、本土の何処かにたどり着いたことを聞き伝えられました。

当時は連絡の出来ない時代ですから島では全員が死亡した事と考えていたのでしょうか。七軒の家族の悲しみは悲愴^{ひそうしげく}至極であつたと思います。それが何日か、あるいは何十日後、島に戻って来た訳だから其の時の喜びも察するにあまりあることだつたと思います。

その様な状況の下で救われた七人が、金毘羅神社の総社^{そうじや}といわれる四国の讃岐^{さぬき}までお礼参りに上がり金毘羅大権現様のご神体をお受けしてお祈りした神社が、今日、神津島に祀られている金毘羅様だと祖母は話してくれました。あれから七十年以上、往時^{しゆ}が偲^{しの}ばれます。

私が小学生の頃といいましても十歳に成っていなかったと思います。其の七軒はどことこの家かを聞いてはいたものの、当家もその中の一軒であると記憶しているのみで、他は聞き流していた状態でした。

時は流れ、祖母も私が十七歳の時、七十五歳で世を去り、金毘羅様のことも忘れていた頃でした。たしか二十歳を迎えた正月四日だったと思います。

金毘羅様の寄り合いがあるので『呑平』^{のんぺい}宅に顔を出すようにとの連絡を受けて、初めて金毘羅神社の世話人の一人として会合に出席したのが初回の寄り合いだったと記憶しております。其の時寄り合いに出席された人が、会合を開いた『呑平』宅のおじいさん、『五郎兵エ』のおじいさん、『源四』^{げんし}のお父さん（梅田源四郎）、『五郎右衛門』^{ごろえもん}の父（石田昌一郎）、『清水八郎エ門』^{はみづやへもん}の母、と私『石田半四郎』^{いしだはんしろう}、この6軒で寄り合った記憶が最初です。

七軒の中には、梅田新八宅^{しんぱ}も含まれているのだと聞いてはおりましたが、新八宅からは何方も出席されなかった記憶が残っています。昭和三十年代の初めでした。それから毎年、世話人の寄り合いを年に一度、六十年近く続けてきた訳ですが、このところ何年か途絶えております。しかし時代の変遷^{へんせん}で致し方ないと考えられます。

前記致しましたように、昔は正月四日になると年配者宅で会合を開き、一年の会計報告を行いながら食事会をしたものです。当時はほとんどの船からお灯明料^{けんのう}の献納（寄付）があり、金毘羅様の維持費^{いじひ}に当てられていた為、世話人の代表となる方は会計報告を必ず行うのが慣わし^{なら}でした、持ち回りで世話人になられた方は、神社の境内を掃き、神棚を掃除し^{さかき}榊^{さかき}はいつも枯らさないように、大変なご苦勞をされてきました。昔ほどではありませんが現在でも其のことは引き継がれております。金毘羅様は、神仏習合^{しんぶつしゅうごう}の神社で榊^{さかき}も供え^{そな}えるが焼香もする神社です。

世は移り歴史も薄れ、漁師^{すうはい}の崇拜する対象の神様など心に止める漁業者の方々も数少ない時代^{いっごころ}に変わってしまったことは否め^{いな}ません。

さて、それでは何時頃の時代^{いっごころ}に金毘羅様をお祀りすることになったのだろうか、私は其の点に大変関心を持っておりましたことは冒頭に申し上げましたが、平成十二年七月神津島に未曾有^{みぞう}の大地震が襲いました、其のことは村民誰もが忘れる事が出来ない災害の記憶であろうと思います。

私はある日のこと、自分では行くともなく自然と金毘羅様へ足が向いていました。今、其の時のことを振り返ると不思議でなりません。一応昔の様な世話人という事ではありませんでしたが、金毘羅様の本殿を開ける鍵を持っていたので本殿のガラス戸を開けてみたくなり、ガラス戸を開き、内宮の扉までも開いて見たい気持ちが起き、開けることにしました。気持ちの中ではもしかしてこのような事までして何か崇^たりでも、と思いながらも普段崇^{すうはい}拝をし、一生懸命崇^{あが}め



尽くしているので罰はないでしょう。もし罰をあてる様な神様であれば正しい(神)とは思えないなど、考えながら恐る恐る扉を開け吃驚^{びつくり}してしまいました。

何十年も見たことの無い金毘羅様の御神体が引っ繰り返っているではありませんか、私は自然に合掌しながら、『起きて下さい、立って下さい』と思いながら安置させたら、自然と目を閉じ、再度合掌してしまいました。金毘羅大権現様が私を呼んでいたのでしょうか、私の気持ちを金毘羅様に向かせたのも扉を開けさせたのも自分ながら不思議で、本当に不思議に思えてなりません。

以来、天気の良い日は金毘羅様に行き建物や本殿のガラス戸等に、水掛けをして周りを洗い流し、内宮の扉も開いて合掌しております。其の時、というか大地震の折、初めて金毘羅様の御神体を見た訳ですが、何か大きな動物らしき四本の足で立っている、其の背中にまたがった威圧感を感じる御神体でした。

象頭山



そこで、冒頭に記しましたようにお祀りされた時期は何時頃であるのか、其のことも判明されました。・・・と言いますのは御神体が安置されている内宮の祠ほこらの中に棟札むねふだが四枚重ね、収めて有るのに気付きました。字も薄れていましたが手に取ってみると、文化七年（千八百十年）に建立されていることが記されて有りました。今年は二千四年ですから、二百四年前に祀られた事になります。

祖母から聞き伝えられていた家庭の名前（世話人）が、棟札に記してあり読み取ることが出来ました。やはり七軒だったのです。

その後天保三年四月（千八百三十二年）二十二年後には二回目の建て替えがされております。当時ですから屋根等、杉皮か、藁葺わらぶきで朽ちるのも早いいため建替えも早く行われたことと思います。更に安政四年（千八百五十七年）には三回目の建替えがされているのですが、その後は明治六年十二月、四回目の改築が行われたことも判明されました。然し、その後現在に至るまで約百三十五年間の記録が残されてお

りません。その間には何回かの改築がされたことと思われませんが、その間は不明です。

其の為、老朽化ろうきゅうかしていた社やしろであり平成元年二月、漁協や村役場等からの助成をいただき、鈴木工務店により現在の社堂に建替えられ現在に至っております。

私は前記で述べた通り、昔から当家が係わりをもつ家庭であることを心の中に秘めて生活ほんぐうしてきているため、一度は本宮である四国、讃岐さぬき（香川県）の金毘羅様に御参りに行きたい、と思い続けていたため家内と二人でお参りに行って来たのですが、また一つ疑問に思っていたことが判明しました。・・・

と言うのは『御神体が動物らしきものの背中にまたがって』と記しま

したが、それは象の背中にまたがっている御神体であることが解りました。

その理由ですが讃岐の金毘羅大権現様が祀られ安置されている場所（山）が『象頭山』^{ぞうずさん}という

象の形をしている山に祀られている為、神津島の金毘羅様の御神体も象の背中に乗っていることが解かり納得した次第です。

全ての物事がそうであると思いますが、そのことに関心を持ち続けていると、其のことの疑問の何かが少しずつでも解かってくるものであるとつくづく痛感いたしました。

後世を生きて来られる人達の為にも昔から聞き伝えられた経緯を残しておきたいと思っています。



平成二十六年三月十五日

調査記録 石田 正一

（本人原稿）



神津大好き！

昭和六年十月二十五日生 八十二歳

浜川 喜久子 （彦左）

私の生家は『清七』で、一男四女の末っ子に生まれました。長女は清七の芳子、次女は東京の練馬区に住んでいます。『久六』の静子は亡くなりましたが三女になります。兄の竹次郎は戦死してしまいました。

子供の頃一番仲が良かったのは、『もろみや』の長女の清水美千代さんでした。同級生で当時の学校の机は細長い二人用で、いつも一緒に机で並んで勉強していました。

美千代さんは、上の学校に進学することが出来たので、中学を卒業

の後、上京し、東京で後に『三国志』等で有名な漫画家の『横山光輝』よこやまみつてるさんと結婚しました。子供も一人できたみたいですが、外国で体調を崩して病気になり、病院に入院していたみたいでしたが、「退院して来たよー」と電話をくれたりしていました。でも、結婚して数年で亡くなってしまうました。まだ若くて本当に残念でした。亡くなるまですずつと文通していたくらい仲の良い友達でした。

それと『多幸堂』の浜川依子さんよりことは同じ二分団で、依子さんは唄がとても上手い人でした。彦左の尚美さんなおみ（彦彦さんの妹）も同級生で声も良い人でしたが、奉公に出た先で『結核』けっかくを患わずってしまい、神津に帰って養ようじよう生していましたが、私が嫁に来てすぐの頃に亡くなってしまいました。長生きはしませんでした。すが、す

ごく元気な
人で、よく
遊んでくれ
ました。

子供の頃の
遊びは『お
はじき』を
したり、麦
やササギを

入れたお手玉なんかも自分達で縫って作っていました
が、それよりドッジボールが流行^{はや}っていて学校の運動



場で時間さえあればよくやっていました。海山の遊び
というのは、畑の手伝い等で忙しくて、あまり行く間
もありませんでした。

昭和二十年頃は戦争も激しくなり、疎開の話も出て
くるようになってきました。清七のばあさんは『貞エ^{さだえ}』

から嫁に來た人で、上の姉さんが福井県の方に住んで
いました。東京で働いていた親戚の『又四^{またし}』の叔母さ

んも疎開しているの、そっちの方が安心だというこ
とで、三月に福井へ縁故疎開^{えんこそかい}することになりました。

日曜日に『宮ッ河』の畑にフキを取りに行った帰りに
両親が「早くお前、貞エの子も行くツつうしかい先に
な^なって行ってーれ、おらあ後から行くしかい」と言わ

れて、すぐに畑帰りの服のまま行かされました。貞エの爺さん婆さんと子供三人、そして私とで船で東京まで出て知り合いの家に一泊して、寝る所がないので押入れの中に入って寝ました。途中で空襲警報があつて、思わず飛び出しましたが、外へ出ても逃げる場所も分らないので、そのまま押入れの中で一晩を過ごししました。次の日、やつとので福井に着くと、伯母さんが迎えに来てくれました。そして向かった所は、石でできた家で、見渡す限りの田んぼがある処でした。福井の吉野中学校に通えることになりましたが、戦時中で勉強の授業はしませんでした。学校は兵隊さんの寄宿舎みたいになってしまっていて、戦争に出ていく

支度やら食事を作る人や何百人もいました。私達はこのように一週間に一日、月曜日に学校に行つて、あくる日から織物工場に行つて兵隊の着る衣服の織物を織るのがほとんどでした。それでも一生懸命やつて卒業証書をいただき、成績は全部『優』をもらつて嬉しかったのを覚えています。

そして神津から大勢で疎開に来て容易ではないので、又四の叔母さんが『八田村』の友達の所を借りて、子供を連れて別に住むことになりました。働かなくてはならないので、叔母さんの子供を爺さん婆さんに預けなくてはならなくて、私が学校の行き帰りに、その子

をおぶって連れて行くことになりました。

学校が終わると毎日、爺さん婆さんのところに預けて
いる子をお
ぶってトン
ネルの中を
一時間もか
けて叔母さ
んの所まで
連れて、そ
して朝の五
時か六時の
暗いうちに

自宅庭にて、一夜だけ咲く月下美人



起きて叔母さんの所に行って、またその子をおぶって
爺さん婆さんのところに預けて学校に行っていました。
毎日、朝晩朝晩まあ本当に大変でした。　そんな
中、道の途中で水の流れるこんもりと盛り上がった処
に、家族五人がみんな聾^{ろう}啞^あ者の方の家がありました。
その家のお婆さはが、しゃべれませんでした。が、「がん
ばれより、何^{どこ}処まで行くだあり」という感じで手まね
をしながら、可哀想だと泣きながら私をさすってくれ
ました。そのお婆さんが迎えてくれて励ましてくれて、
嬉しくて嬉しくて、おかげで随分と折れそうな心が助
かりました。今でも本当に忘れられません。そして毎
日おぶって連れてきた子も、戦争が終わって神津島に帰る

時には、もう情がうつってしまつて泣き泣き別れて来
ました。

その後、清七で二番目に生まれた兄、石田竹次郎は
妹の私から見ても、どこにか可愛いらしい人でしたが、
太平洋戦争時にシンガポールで戦死してしまいました。
それも戦争が終わったばかりの時に、隊の上官が防空
壕から「出るな！出るな！」ときつく言つたのに、言
うことを聞かないで外へ出たとたんに撃たれてしまつ
たそうです。戦争が終わったその時まで生きていたの
に、そのまま出なければ神津に帰つてこれたものをと
思うと、かあーいー、かあーいーで（可哀想で可哀想
で）仕方ありませんでした。

同じ隊で防空壕に入っていた三重県出身の戦友の方が
とても親しくしてくれていて「竹次郎君は大人しい人
だった、どうにも可哀想で忘れられなくて」と泣いて
くれて、そしてシンガポールまで慰霊に行つて来たと
電話をくれたり、毎年清七と久六と彦左に米と餅を送
つてくれます。私達も久六のおじさん達と一緒に三重
までその人に会いに行つて来ました。二度行つて最初
の時は元気だったのですが、次の時はもう亡くなられ
ていてお墓参りをしてきました。お子さんが一人いて
「爺さんから、毎年送るように」と云われているから
と、亡くなった後もずーと送つてくれています。これ
も戦死した兄さんの人柄から続いていることを思うと、

亡くなったのはとても悲しいですが、兄さんがこの人達を通じてずーと私達姉妹を見守ってくれているように・・・感謝にたえません。まだ二十二歳で独身でしたが、寺の慰霊碑に名前が刻まれています。

八月に終戦になり、熱海で奥多摩方面の疎開地に居た人達と一緒にあって、船を待つて神津島に帰ってきしました。当時十七歳くらいでしたが、私は内地で働くようなことはありませんでした。神津に戻って来て、当時の北川先生（医師）の薦め^{すす}で診療所に勤めることになりました。「医療の免許を取ってがんばれば食べていかれるから、どんな目えしても苦勞しても、苦勞のし甲斐はあるから一生懸命がんばるんだよー」と言っ

てくれました。事務をしながら免許は持っていないけど薬剤師のような薬を包む仕事もしていました。二年ぐらい働いたでしょうか、だんだんと資格や技術を持った人達がやって来て、その中に素人の子供が入ってやることはできなくなって辞めることにしました。

診療所を辞めると、私が辞めるのを待っていて、親戚の大家のお爺さんから「郵便局が空いているから来ないか？」との話が来しました。まだ電話業務が始まる前で、『金エ』の松江睦^{むつみ}さんや『おらんか』の信一郎さん、白崎嗣夫さん達がいました。その頃の郵便局は電話事業もやっていて、電話が開通した時は村の皆から喜ばれました。そして二、三年、電話の交換手をさ

せてもらいました。

当時、『彦左』のお父さん（浜川彦吉）が郵便局の事務長をしていました。私を気に入ってくれたのか家の嫁に欲しくて、「息子の嫁に來ないか」と誘われていました。「（他

電話交換手（郵便局）時代



の）何処にも（嫁に）行くなよー」と言われていて、宜彦さんも優しくて良かったので彦左に嫁に行くことにしました。

夫はその頃は漁協に勤めていましたが、神津島に『七島信用組合』ができることになり、漁協を辞めて大島の信用組合本店に布団も持ち持ち二ヶ月ほどの研修に行きました。そして今は家を解いて空地になっていますが、『藤造（橘屋）』の玄関先の一間の部屋を借りて『七島信用組合神津島支店』が開業し初代の支店長になりました。その後に『太郎エ門』の前の今は駐車場

になっている『千歳橋』の前にコンクリート建ての信組の建物が完成して、そこで長年勤めました。その後

は役場の収入役も十年勤めています。

私は郵便局を辞めてから家に入り、
舅は優しゅうとめました。



しくていい人でしたが、しゅうとめ姑はとても『おっかなく』
て恐い人でした。子供は三千男・靖成・秀俊と男の子
が三人できました。

そうしている内、役場から「民生委員になってもら
えませんか？」との話を頂いて引き受けさせてもらい、
河合よし子さんや浜川依子さん、石田富江さん達と一
緒に三十年間もやらせて頂きました。民生委員の時は、
相談に来る人も長年やっている間にはかなりの数いま
した。神津で相談に来たり、訪問したりした人達は金
銭面の関係とかもありましたが、ほとんどは病気の人
達の相談が多かったです。お医者さんでも看護師さん

でもないので、役場の福祉課や『民生委員協議会』等に持ちかけて、福祉のサービスを受けてもらったり、内地の病院に受診してもらうように手配したりとかは結構しました。

皆で『島しよ民協総会』などに出席して、東京や他の島やあちこちに行ったりしたのは楽しい思い出です。神津と新島で開催した、民協か社協の連絡協議会では、小笠原の民生委員の人達が、けっこうな旅費もかけて初めて参加してくれて、会合の後、各島みんなで歌ったり踊ったりして楽しんで、すごく良い思い出になりました。

社協の『お見舞い訪問』にも何度も参加させていた

だいて、内地で長期に入院や入所している方達の話や聞いたり、神津の近況を話したり、中には帰りがけに泣きながら「おらくも（神津に）連れてってえ」と追っかけてこられたり、と一緒に泣いたりもしてきました。

余談ですが、『お見舞い訪問』に社協の前田美枝さん



社協 お見舞い訪問時

と社協の会長の梅田勝海さん、役場の福祉課で『柳作』^{りゅうさく}の渡辺悟朗さんと私のグループで千葉の奥の方へ向かった時、途中で電車を乗換えるために別の電車に乗って、「発車までしばらくお待ちください」のアナウンスで車内で時間待ちをしていると、勝海さんが煙草を買うと言って出て行きました。そしてホームの売店で買って戻って来たと思ったら、勝海さんの目の前でぴゅーっとドアが閉まってしまい、「あれやー」と思った瞬間、勝海さんがホームに一人たたずむのを三人で見ながら電車は走ってしまいました。次の電車で勝海さんが乗って来るのを待って行きましたが、こんな珍道中^{ちんどうちゅう}も思い出に残っています。

民生委員になったおかげで、大変な思いや辛い話もたくさん聞きました。こうして内地や他の島の人達とも交友を持てたことを嬉しく思います。長年、民生委員を続けてきたおかげで、表彰状を頂き感謝しています。

神津の中では『婦人会』や『芸能保存会』にも入っている



河合よし子さんと婦人会の踊り

伊豆諸島東京移管百年祭パレード



て、彦左が唄や踊りの練習場所になっていました。『平七』のお父さんが長になつて、『与四郎』のじいだとか、『仙吉』のおじさんは踊りが上手くて、みんなして七ゝ八人のおじさんが集まって、「阿波の命」から「大漁節」から島唄をたくさん唄って踊って、楽しくてすぐ良かったです。イベントとか大きな催し物があると、踊りの練習の時は何十人と来るので、学校とか広い場所を見つけて練習したりして、本番の時は一番最初に出て唄って踊りました。依子さんの唄も一番上手くて、こういう時には『多幸堂』系統の一家が入って唄い踊りしてくれるのが何より大事でした。

昭和五十三年には『伊豆諸島東京移管百年祭』にもみ

んなで参加して、日比谷公園から新橋、銀座、数寄屋橋、都庁までの二・五キロを踊りながらパレードしました。今でも機会があれば踊りたいです。

家を新しく建てたあと、彦左のお義母さんが亡くなつて、もう三十回忌も済ませましたが、それからは一人で『面房^{めんぼう}』の畑作業をして『絹さや』作りも二十年以上続けたでしうか？

ずっと畑通いもしてきましたが、四年くらい前の春頃に面房の畑で倒れてしまいました。午前中に畑に行つて、お昼頃に気を失つて倒れて、草の中でそのままになっていたみたいです。そして午後の四時頃に一人で意識が戻つて目が覚めました。目が覚めたから良かったものの、これが覚めなかったらと思うと、本当に『そのまま逝きそこなつた』という感じでした。そしてどうにか這いずりだして道へと出て、人の来るのを待っていました。すると工事の帰りだったのか『伝八』のお父さんともう一人乗った車が来るのが見えしました。でも助けを頼み損なつてやり過ぎしてしまいました。車はそのまま行つてしまったのですが、普

段の付き合いもしていたお蔭か、伝八のお父さんが変に思つて「どうしたもんだあ、あんだか変だしかいでまあ、どうかしたじゃあないろうかと思つて来たあ」と車を引返して来てくれました。そのまま診療所へと連れて行つてくれて、有り難いことに助かりました。診療所で日射病だということで、先生から「危ないところでしたが、道で動かないで休んでいたのが良かったんでしよう」と言われました。命拾ひして元気になりましたが、畑の方はもう通うことはできなくなつて、ハウスも役場の人をお願いして片付けてもらいました。今はお父さんも『やすらぎの里』のホームに入り、私もデイサービスやショートステイでお世話になつて

います。次
男の靖成が、
内地での仕
事を終えて、
神津に帰っ
て来て一か
ら十まで面
倒をみてく
れています。
みんなに世
話になって
く、昔の事



ホームにて80歳の誕生会

を思うと、良いことも悪いことも、今はみんな懐かし
い思い出です。（笑い）

（以上、聞き書き）

随想・句・川柳

昭和五年四月二十一日生 八十三歳

稲葉クニ子（久四郎）

稲葉クニ子さんが思いつくままに書いた随想や川柳等を、『文六』の土谷文治さんが筆で清書してくれました。そのままご紹介します。

雨だれを

じっと眺めて心はうつろ

ボケたらどうする気にかかる

雨だれを

じっと眺^{なが}めて心はうつろ

ボケたらどうする気にかかる

いつの日か

旅立ちの為 身辺整理

出てくるものはボロばかり

いつの日か

旅立ちの為 身辺整理

出てくるものはボロばかり

年とりて身は重く働けず
外を眺めて悲しさつのる

年とりて身は重く働けず
外を眺^{なが}めて悲しさつのる

冷蔵庫 開いて

いたぞと 夫どなる

ニトロなめても 治まらず

肺も心臓も

酸素たりぬと大さわぎ

じじつんぼ

一方通行どなるだけ

つかれてばばは だまるだけ

冷蔵庫 開いて

いたぞと 夫どなる

ニトロなめても 治まらず

肺も心臓も

酸素たりぬと大さわぎ

じじつんぼ

一方通行どなるだけ

つかれてばばは だまるだけ

曾孫来て可愛く

踊るその姿

大爺の顔のしわも

伸びるお正月

クニ

ばばハ首縦横振り

手と振りテレビの

手話もおぼえかね

クニ

曾孫来て 可愛く

踊るその姿

大爺の顔のしわも

伸びるお正月

ばばハ首縦横振り

手と振りテレビの

手話もおぼえかね

青空ながめて

ぼんやりとぼけたか少し

おかしな

クニ

青空ながめて
ぼんやりと ぼけたか少し
おかしな

雨が降る

少しは遠慮して

降ればよい

クニ

雨が降る
少しは遠慮して
降ればよい

この世はつらい地獄かよ

浄土は極楽西の国とか

覗いてみたい西の国

クニ

この世はつらい地獄かよ
浄土は極楽 西の国とか
覗いてみたい西の国

節分や

八十四ヶの豆多過ぎる

誰かほしくないかしら

クニ

節分や
八十四ヶの豆多過ぎる
誰かほしくないかしら

川柳がない、詩がないと
戸棚にもない、押入れにもない
目の前に有るのに

クニ

良い日和
磯へのり採り行きたくて
心がうずく足が憎い

クニ

若き日は毎日一人でも神詣り
心あせれど今はかなわず
もう一度行きたい 天上山

夕暮れは何を食うかと
爺々どなる
女と云う字を終りたい

川柳がない、詩がないと
戸棚にもない 押入れにもない
目の前に有るのに

良い日和
磯へのり採り行きたくて
心がうずく足が憎い

若き日は毎日一人でも神詣り
心あせれど今はかなわず
もう一度行きたい 天上山

夕暮れは 何を食うかと
爺々どなる
女と云う字を終りたい

夕焼の西空赤くちぎれ雲

何と見るのかじつと動かず

地球の善悪見ているのやら

クニ

夕焼の 西空赤く ちぎれ雲
何を見るのか じつと動かず
地球の善悪 見ているのやら

週一度

心も休まる

やすらぎの里

クニ

週一度
心も休まる
やすらぎの里

午だもの

元気に跳ねよう

根性ひとすじ

クニ

午^{うま}だもの
元気に跳^はねよう
根性ひとすじ

川柳

ぢぢからつんぽ
 ばば首たてよこふり手であいず
 テレビの手話もおぼえかね

川柳

ぢぢ からつんぽ
 ばば首たてよこふり手であいず
 テレビの手話もおぼえかね

ひまご来て母がうたえば
 おどり出す小さな二才の子のす
 ぢぢのしわ　ワビる正月

ひまご来て母がうたえば
 おどり出す小さな二才の子のす
 がた　ぢぢのしわ　のびる正月

空ながめ流れる雲に手を合せ
 遠い国に住む娘孫にことずけ
 なのむと云ひたい心

空ながめ流れる雲に手を合せ
 遠い国に住む娘孫にことずけ
 たのむと云ひたい心

天上山

天上山 神津島うシンボル　私わ
 ニッ山が大好だ都合ひう　解に解
 か三ッ才来ッも島を見　なる燈のなる
 ニッ山を見る　手術の痛も心の痛も
 いやさ小ッは小ッとする　若く身体
 が足が歩ける時わ毎月ようになん
 と登った友達が行かなくなッかうわ
 一人や登った神様の前の芝に座ッ
 木にぶりと食べ神様に話ッかける
 今も元気で来させてもうッ年を
 無事に年とッ暮すやと感謝ッ
 木々ッ山　石ッ山　くしが峰のすてきな
 なりあいこの島に生れ育った事を感謝し
 幸せだと心から思った　今わもう足が
 行けなくなった　悲しいけど仕方がない事だもの

天上山

天上山 神津島のシンボル　私わこの山が大好だ
 都会から船に乗ってかえって来ても島が見える時
 になるとこの山を見る　手術の痛も心の痛もいや
 されてははれととする　若く身体が足が歩ける時
 わ毎月のように友達と登った　友達が行かなくな
 ったからわ一人で登った　神様の前の芝に座って
 おにぎりを食べ神様に話しかける　今日も元気で
 来させてもらって毎日を無事に生されて暮す事を
 感謝してお礼して　横になって青い空すみきった
 空気　木々の山　石の山　くしが峰のすてきな
 りあい　この島に生れ育った事を感謝し幸せだと
 心から思った　今わもう足が行けなくなった　悲
 しいけど仕方がない事だもの

冬

冬はいやだなあ

毎日毎夜ガラス戸をたたく風の音
げんかんとあけるような音
だれか来たかとふとんから出てみる
誰もいない風の音にだまされて
寒いのに私わふとんの中でふるえる

雨

雨もいやだなあー

トタン屋根をたたく雨
ガラス戸をあけてみる
雨が私の顔をたたく
寒いのに

冬

冬はいやだなあ

毎日毎夜ガラス戸をたたく風の音
げんかんとあけるような音
だれか来たかとふとんから出てみる
誰もいない 風の音にだまされて
寒いのに私わふとんの中でふるえる

雨

雨もいやだなあー

トタン屋根をたたく雨
ガラス戸をあけてみる
雨が私の顔をたたく
寒いのに

もはや

できあいの思想にわよりかかりたくない
できあいの宗教にもよりかかりたくない
できあいの学問にもよりかかりたくない
いかなる権威にもよりかかりたくない
ながく生きて心そこ学んだのわそれ位
じぶんの耳でできき目で見て自分の二本の
足とつえで立っている
なにが不都合のことやある
よりかかると思えばいすのせもたれだけ
それさえも背骨と腰の骨折六本
痛くてよりかかれない身体しうがい者だ

もはや

できあいの思想にわよりかかりたくない
できあいの宗教にもよりかかりたくない
できあいの学問にもよりかかりたくない
いかなる権威にもよりかかりたくない
ながく生きて心そこ学んだのわそれ位
じぶんの耳でできき目で見て自分の二本の
足とつえで立っている
なにが不都合のことやある
よりかかると思えばいすのせもたれだけ
それさえも背骨と腰の骨折六本
痛くてよりかかれない身体しうがい者だ

夢もあつた

望もあつた

恋もあつた

泣いてなみだを流した事もあつた

泣かせた時もあつた

この世は笑ふ事よりつらい事の方が
多いようだった

八十四年の年月生て来た

若い頃わ七才位迄生ればよいと

思つたのにいつのまにか八十四才に
なつていた何をして来たのだらう
雨だれの落るのを見ながら
しみじみ思ふ

夢もあつた

望もあつた

恋もした

泣いてなみだを流した事もあつた

泣かせた時もあつた

この世は笑ふ事よりつらい事の方が
多いようだった

八十四年の年月生て来た

若い頃わ七十才位迄生ればよいと

思つたのにいつのまにか八十四才に
なつていた何をして来たのだらう
雨だれの落るのを見ながら
しみじみ思ふ

イスに座つてなす事もなく

毎日ほたらける時わまだ畠で

一生懸命レザー切つていたのに

今や時間がありません

ぼんやりとまどから西の空を

見ている青い空夕陽にそまつた

赤いちぎれ雲が流れてゆく

なんとなく涙がある悲しいのか

淋しいのか生て来た道を
しばしふりかえる

イスに座つてなす事もなく

毎日ほたらける時わまだ畠で

一生懸命レザー切つていたのに

今や時間がありません

ぼんやりとまどから西の空を

見ている青い空夕陽にそまつた

赤いちぎれ雲が流れてゆく

なんとなく涙が出る悲しいのか

淋しいのか生て来た道を
しばしふりかえる

人わ苦しめば悲しめば
少しわ深くなるだらうか
人のいたみがわかる人に
なれたらよいのに

娘ざかりをせんそうで暮し
西多摩の山奥の頂上迄
行き 熊が夜わ出るからと
トイレにも行けず
たたみ二じよう位いて有る
カイコでもかつていたらしい
小屋に父母と姉と四人で三ヶ月位
いながら家を去るには行きもやして
なべで湯をわかしせんめん器で身体を
流して行水の水気が暮した日々

思ひ出す 十年位前に

一度、当時の人達に逢ひに行つたが
みんな死んでなかつた 一人生て居
た人も今わ死んだ
住んだ小屋も 母屋も もう住む
人もないだらう

変らぬものわ今も昔も川の
ながれだけわ有るだらうと思う

人わ苦しめば悲しめば
少しわ深くなるだらうか
人のいたみがわかる人に
なれたらよいのに
娘ざかりをせんそうで暮し
西多摩の山奥の頂上迄
行き 熊が夜わ出るからと
トイレにも行けず
たたみ二じよう位いて有る
カイコでもかつていたらしい
小屋に父母と姉と四人で三ヶ月位
いながら家を去るには行きもやして
なべで湯をわかしせんめん器で身体を
流して行水の水気で暮した日々

思ひ出す 十年位前に

一度、当時の人達に逢ひに行つたが
みんな死んでいながつた 一人生て居
た人も今わ死んだ
住んだ小屋も 母屋も もう住む
人もないだらう
変らぬものわ今も昔も川の
ながれだけわ有るだらうと思う



八十四年も生い私わ
なにをただううえらい人にも少ない
人にもなれなかつたようだ

長い年月うしなつたものや えたもの
はかりにかけろすべもない
あと何年生るか何か月かと思ふ

旅のおわりにわ又一つの旅が有る
その旅立が平穩へいおんで有るようにと
願う

八十四年も生て私わ
なにをただうう えらい人にも少ない
人にもなれなかつたようだ

長い年月うしなつたものや えたもの
をはかりにかけろすべもない
あと何年生るか何か月かと思ふ

旅のおわりにわ又一つの旅が有る
その旅立が平穩へいおんで有るようにと
願う

いつも笑つて
人生の最後を
あかるく生よう
明日は向う
根性一つで道を行く

やっぱり家(神津)がいい

昭和三年九月三十日生 八十五歳

梅田 千代子(下の沢万次)

私の実家は神津館の『文吉』^{ぶんきち}です。女三人男一人の長女に生まれて、下は鈴木工務店をしている『喜楽』^{きらく}の三重子と『柳七』^{りゅうしち}の久子、そして一番小ごい神津館の八寿延^{やすのぶ}は先に逝ってしまいました。

学校は神津尋常高等小学校で八年通い、楽しく過ごしました。子供の頃は河合よし子さんや『吉兵エ』^{きちべえ}の関ミヨ子さん、それと『半平』^{はんぺえ}の松本すみさんと私の同級生四人で仲良しでした。

夏の時季は海に行ったり、天草をもぐったりしましたが、今の様に色んな物があるわけでもないのです、昔は集まってする遊びといえ、た

いがい決まっについて『お手玉』とか『お弾き』^{はじ}ぐらいのものでした。

私達の一級上の学年までは修学旅行に伊勢神宮とかに行くことができませんでした、私達の学年は戦争の影響もあつてか、修学旅行には行けま

せんでした。進学もしたかったのですが、今と違って昔のこととで家の方も事情が許さなくて行くことはできませんでした。

実家の『神津

館』は、明治時代

に私のお祖母さんの代から旅館を始

昔の神津館(祭りの時)



めました。神津で一番最初の宿だと思います。

その頃は観光客はほとんど来なかった時代ですが、村関係のお客さんとか、神津島に始めて水道を敷設しに来た『松戸工兵隊』も神津館に泊まったと聞きました。私も子供の頃から学校に通いながら旅館の手伝いをしていました。父の鈴木進は旅館の方ではなく『武左』の『清光丸』に若い時から長く乗っていて船長もしていました。

段々と戦争も激しさを増して、文吉のお父さんは三月の初めの頃、まだ寒い時期に恩馳で敵機の空襲にあってしまいました。可哀想に『友八』の小父さんは機銃掃射で即死してしまつて、お父さんの方は左の横腹と左腕の間を弾が通つて行つて、着ていた厚いセーターを剥ぎ取られたと言っていました。弾で怪我をして担架で運ばれて、四十日あまりの病院通いをしました。

そんな風に神津も危険になってくると、疎開の話が持ち上がってきました。場所は西多摩の『小河内村』でした。空襲で生き延びたお父

さんも一緒に、五区と七区の人達と七月の二日に神津を出て伊東に着き、列車に乗つて小河内村まで行きました。

一番先に神津を出て、帰りは最後の方で、疎開していた期間としては長い方でした。小河内村に着いてもすぐには荷物が届かなくて難儀はしましたが、麦や米を持つて来ていたので助かりました。配給米などを貰いに行くのは、何時間も歩いて水滴がぼたぼた落ちる洞窟のような所を通つて役所の配給場所に行かなくてはならなくて



大正15年 簡易水道完成時 松戸工兵隊一行

大変でしたが、疎開自体の生活は、他の区の人達が色々大変な思いをしたという話を聞きました。私達の五区・七区の人達は幸いなことに、そんなに厳しいということはありませんでした。

そして八月十五日に戦争が終わった事を知ったのは、小河内村に疎開した各家は、数件ごとに別れて住んでいて、離れた峰^{みね}の方に居たのが『喜平』とか『金助』でしたが、もつとずっと奥^{おく}の方の部落に住んでいた（下ん沢の）『市川^{いちかわ}』の小母^{おば}さんが「やあ、戦争は負けたつうで、負けたつうじょ！」と言つて教えながら道を通つていきました。やつと終戦を迎えることができましたが、神津に帰つて来れたのは九月になってからでした。旅館をやつていたおかげで業務用の米等があり、戦中・戦後も食べる物にはそれほど不自由しなくて済みました。

学校を卒業して疎開に行き、戦争が終わってから、伊豆の伊東に奉公に出ました。伊東には同級生はいませんでした。が、神津から奉公に来た人は何人か居たと思います。私は、今はもう無いみたいですが伊東駅の近くで『東洋館』という旅館に入り、そこで女中さんの下働きから始まって客室係として仕事をしていました。三、四年も居たでしょうか。

仕事の内容は旅館業の事なので実家での役には立ちましたが、どうも私は旅では（内地では）暮らせなくて、帰りたくて帰りたくて仕方ありませんでした。

奉公した人の中には行つた先で馴染^{なじ}んで、そのまま結婚して内地で暮したり、逆にずっと働いていたかったのに、急に呼び戻されて「もう戻るな」「嫁の先が決めてある」等々でそのまま辞めさせられた、という話もあります。

私も伊東の方で縁談の世話をしてくれる人がありましたが、内地で暮

すのはどうしても嫌だったので、嫁には行かないで神津に帰って来ま

した。

神津に帰って来て、家の手伝いをし
て暮していました。そしてここ（下ん
沢の『万次』に嫁に行くことになり
ました。特に世話をやいてくれた人が
いたという事ではなくて、島の人は、
特に辺り近所の人達はみんな知合いな
ので、自然に付き合って結婚すること
になりました。

私が万次に嫁に来る前に、夫は新島に
兵隊に行かせられて、『箱屋』の小父
さん達と同じ隊で新島の宮塚山にいた
のですが、戦争が終わる直前で戦地



2000年長崎旅行(平和公園)

に赴くことは無く、すぐに終戦になって帰ってきたそうです。

結婚した頃、夫の義一は漁師よしかずをしていました。船は持つてはいま
せんでしたが、他の船で南房総の千倉方面ちくらとか、あちこち行つて漁をして
いたみたいです。

学校を卒業してすぐに郵便局に勤めていましたが、昔の事で、親の
賢蔵けんぞう爺さんが「勤め人だけじゃあ安月給だしかい、そんなことじゃあ
食つていかない」と云つて辞めやさせて、漁師にさせられたとのこと
でした。郵便局にいた頃は『大家』の松江千代ちよさんが局長をしていた
頃で、可愛がられていたそうで、「俺おいや局に居てそのまま勤め人を続
けてゝれば、郵便局長にもなつてゝるだ」とよく言っていました。
神津島にも客が来るようになって、観光客が大勢来ることが分かる
と、それまで四・五件だった民宿も一年ぐらいで島中に広がりまし

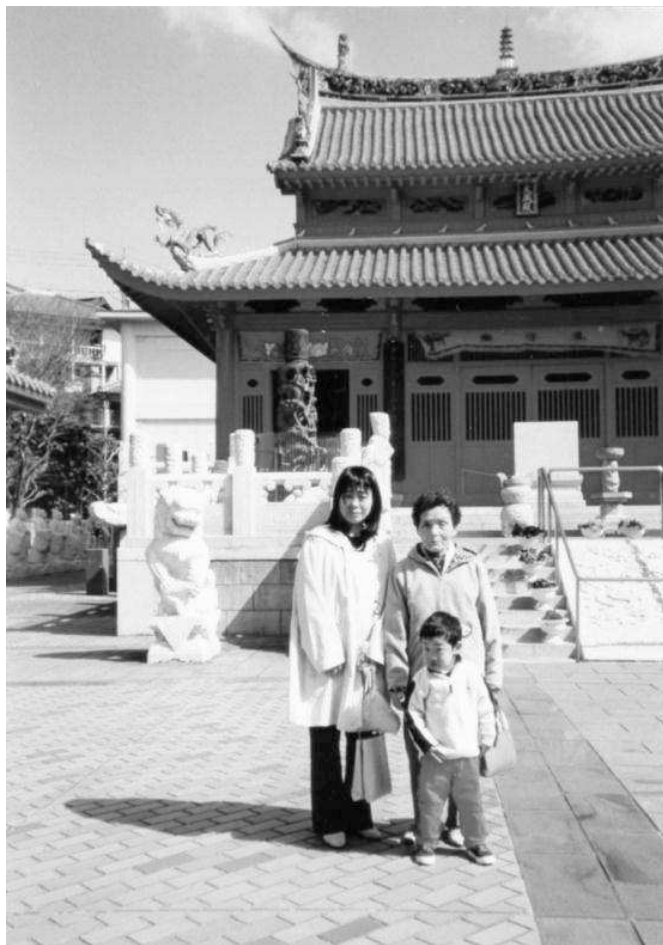
た。万次も『さわや』という名で民宿を始めて、離島ブームの頃には、古い家だったのでやり直すことにしましたが、賢蔵爺さんが「みんな解ほどいてまうだかー、苦勞して建った家だつーに」と心配していたので、母屋に二階を乗のつけて増築することになりました。

そして来島した観光客が島を巡るための足が無いので、夫が『レンタカー』を始めることにしました。最初は石段を上った寺の前に『善八ぜんぱ』の母屋があつて、寺側の方が空いていたので、そこを借りて車庫を作つて



当時のレンタカー事務所

始めました。家の前にある石垣の壁の処に、レンタカーを借りたい客が、出払つている車の帰りを順番待ちで列を作つて、ずらーと並んでいたのを覚えています。



夏場は沢山の客で本当に忙しい目をしましたが、その分稼うぎも多おくて、島中が潤うるつて沸わいていた時代でした。

夫の義一は話すのも達者な人で、村会議員にも成なりました。誰に推おされたというよりも、村を良くしたいと思つて自分で立候補をしたみたい



です。当時の村長とはあまり合わなかったようで、色々衝突もしたみたいですが、四期くらい議員を務めていました。

万次に嫁に来て、子供は三人できました。長女は千葉の流山市に住んでいて、次女は『くめまる糸丸』に嫁いで、長男の圭一が嫁さんと後を継いでいます。

昔からの事を思い起こせば、良い事も悪い事も色々あったと思います
が、まあー今考えると、大病をした
こともないし、何の変哲へんてつも無い、ごく平凡な暮らしをしてきたのかなとも

思います。それが一番いいのかも知れません・・・。

もし、奉公に行っていた頃の縁談で内地に嫁に行っていたら、また違う人生だったかも知れませんが。でもその時、やっぱり私は旅の暮らしには向かなくてえ、家（神津）が良かったみたいです。そのままずっと今まで、神津に収おさまっています。（笑）

（以上聞き書き）

私のあゆんだ道

大正十三年二月一日生 九十歳

石野田 起基（佐吉）

私は大正十三年二月一日生まれの佐吉の長男です。昭和十四年当時、家族は九人（曾祖母、祖父母、母、兄弟五人）もいました。父は昭和十四年十一月に亡くなりました。

子供の頃、私は小学校に入学する前に肺炎を患^{わずら}ってしまい、神津では治療できなくて、大島の波浮港にある親戚の家から母におぶさって大島の病院に通^{かよ}っていました。そのため小学校入学を一年遅らせることになってしまいました。

当時は神津でも牛を飼っている家がけっこうありました。小学五年

生頃から『下の庄九^{しやうく}』で朝と晩に牛乳配達をやらせてもらっていて、六年生の終わり頃からは乳しぼりも習っていました。

当時、庄九の牛小屋が、現在の『潮見寿司』の裏にあり、乳牛二頭と子牛を飼っていて、そこに行つて乳をしぼって庄九に持って行き、殺菌をして配達していました。そして日曜日には時々、庄九の父と牛の餌^{えさ}（茅^{かや}）を採りにテンマー（小舟）で小浜まで行き、茅の刈り方を教わったりしていました。

昔の子供は今の子供と違って言い方は悪いですが、みんな『ガキ』でした。それこそ何処^{どこ}でも彼処^{かしこ}でも暴れ回^{あば}って遊んでいました。三分団と四分団に分かれて仲間でチャンバラをやって、「今日は試合だ」とか言つて金毘羅^{こんびら}に行ったり、今の高校の所が昔は山があつて畠があつて、学校が終わると集まつて、山ん中をこねて遊んだりチャンバラしたり、兵舎もそこにあつて、兵舎の前の苗場で『陣取り^{じんとり}』をしたり、野球をしたりしました。野球は本物のバットは無かったので木の棒の

バットで、野球ボールを使って、グローブは持っている人がいたかどうか憶おぼえていませんが、ほとんどみんな手で取っていました。

昭和十四年三月に尋常高等小学校を卒業しました。数かずえ年で十六歳、現在の中学校二年生に当たります。当時は希望して上の学校に行きたくても、島を出て進学するような時代ではありませんでした。小学校を卒業する前頃から、自分もこうして牛を飼って生活してゆくような考えでいました。

しかし、卒業してからは、当時の神津は『ひらくさ』漁が盛んで、父が今の前浜の蛇へび沢下さわにあった、ひらくさを保管しておく『オオブト倉庫』で働いていたので、私もそこで作業員として四月から働き始めました。

そして四ヶ月が過ぎたころ、当時の大島林業事務所で働かないかという話が来て、所長の木村喜三さんに連れられて大島に行き、昭和十四年八月十日に大島の元村（現在の元町）にある東京府大島林業事務所



大島林業事務所で鈴木賢司君と

にまだ十八歳未満だったので臨時職員として勤務することになりました。

翌年には『はこや』の鈴木賢司君が来て、二年後には『増美屋』の鈴木晴美さんも来て一緒に働き、昭和十八年三月には十八歳になったというこ

とで正規に東京府経済部資材課の府職員（当時は東京都ではなく東京府）となって働きました。

時代は戦争まったただ中の時で、兵隊になるということで昭和十九年二月に神津島に戻り、神津島村に駐在となって、昭和十九年の七月に『源五げんご』の桜井芳子と結婚しました。しかし結婚して一年も経たたない

昭和二十年五月一日に現役兵として境^{さかい}第七〇六九部隊^{おおにし}大西隊（隊長の名前）に入営することになりました。

一緒に入隊したのは新島本村・式根島・神津島・三宅島の三十三名で、私達から二つ下の人達と一緒に、神津からは私と浜川喜一（喜三郎）、石田實（重次郎）、松村喜一（松村床屋）、清水義男（文助）、前田喜一郎（元造）、清水幸太郎（甚吉）の七人です。

入隊の土地は新島本村字向山（現在の温泉のある近く）バラック建ての兵舎で床は板張り、ワラワラムシロを敷きその上に毛布二枚を敷いて寝るといふ、何ともお粗末な建物でした。

一日の日程は、朝六時頃に起床して食事をとり、その後は兵隊として戦う前の基本訓練になります。訓練の仕方だとか、軍隊とはどういうものなのか、初年兵で何も知らないので基本をたたき込まれる訳です。雨の日は兵舎の中での勉強会で、二週間に一〜二回は学科の試験がありました。

食事は朝昼の2食分のご飯がハンゴウで配られるのですが、人によっては二回分を朝、食べてしまう人もいて、食事の環境は劣悪なものでした。そんな悪い環境の中、毎週金曜日が新島の家族の面会日で、新島出身の兵に家族が持ってきてくれる食べ物を買って食べるのが何より楽しみでした。

此处で三ヶ月間の教育訓練を受けて大西隊に配属となるのですが、この部隊は九州の部隊で、初日に言葉が解らず聞き返すと、いきなりビンタをはられました。『反発している、』と勘違いしたらしいと後で分かったのですが、教育期間の三か月間は毎日、一〜二回はビンタで、はられない日は一日もありませんでした。

それは自分がどうこうという訳ではなくて、連帯責任で誰か一人がへまをすると、その人だけではなく一班から三班で三十三人いましたが、「全員外へ出ろ！」と兵舎から出されて、一列に並んで「股を開け！」と言って開かされて一人一人ビンタであおっていきます。股を

開かないとぶっ倒れるくらいで、夕方になって、今日は無いかな？と思っ
ていても、寝る前にも必ずビンタをもらって・・・。

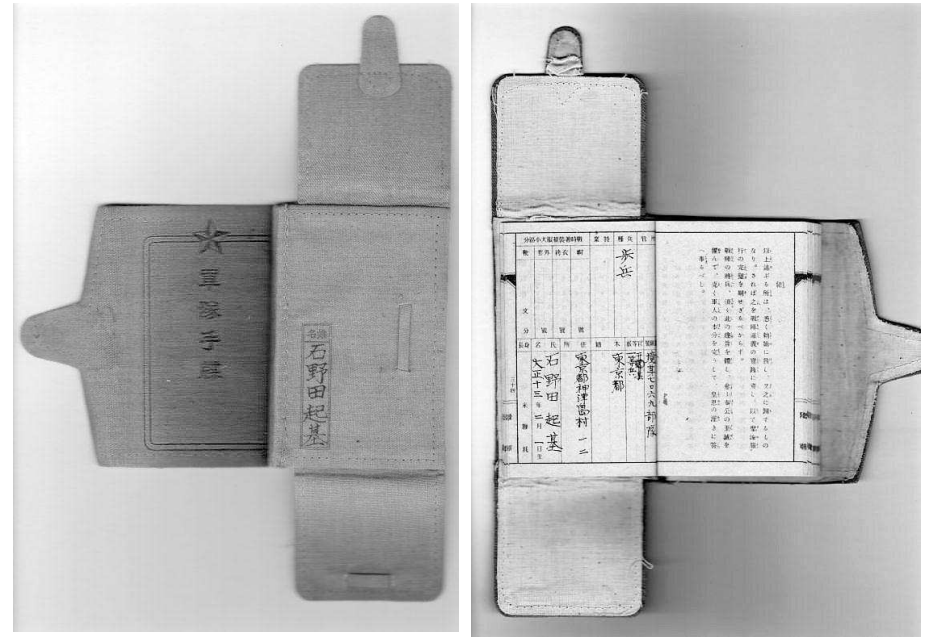
一番酷ひどかったのは、私達の班長が『ピー買い』に行つて、雨にふられ
て剣を濡らして錆びてしまった、ということ、班だけで集められ
て、鞘さやから抜いた剣の背の方で頭をぶっ叩かれた時でした。

「ピー買いに行く」と言つて班長が向かった先とは『慰安所いあんじょ』のこと
で、兵舎から離れた村内（場所は不明）に当時『接待所』として設け
られていました。偉い人から時間区切りで決まつていて私達初年兵は
行けません、小隊に行ったら券があるということでしたが、そんな
のは必要無いと思ひ行きませんでした。たぶん日本全国の軍隊でそう
いうスパルタ教育的なシゴキが行なわれていたんでしょうが、戦時中
とはいえあまりにも理不尽で、そりゃあ酷ひどいもんでした。今の若い人
達にはとても耐えられないだろうと思います。

私たちの上の年代までは外地（当時の支那しな）まで行つて戦いましたが、
戦況もどんどん悪くなつてきて、もう外地に派兵して行くだけの余裕
など無い状態だったのでしよう、この頃は日本の中では『本土防衛』
という言い方をしていました、皆各島で入隊して教育を受けて、何
処にも出兵せずに島に戻り、敵が来たら自分達の島は自分達で守る、
ということになっていました。

そんな苦しみの三ヶ月間の軍隊生活もあつてなく終戦を迎えてしまひ
ました。入隊した時はもちろん、こんな短期間で戦争が終結するとは
思つてもみませんでした、昭和二十年九月十七日に現役満期除隊し
ました。

軍隊手帳は、私達より以前に兵隊になつて戦地おもむに赴いて、現役で
帰つてきた人達の中には、まだ持つている人もいます、私
達には除隊する時に『軍関係の物は手帳も何も全部焼却処分しろ！』
という命令が出ました。だけれども私は、五月に入つて教育を受け
て、もう八月には終戦で、その間こんなに叩かれて、ひどい目にあつ



て、ビンタだけ貰って帰って来た様なもので、得るものも何も無かったので、これだけは記念にして持って帰ろうと、出る時にとつ捕まっつて叩かれても、今度はこつちがぶつ叩き返してやる！というつもりで持って帰ってきました。

私達の一つ上の人達は、入隊する時は一度役所を辞めて入隊したのですが、私達の年代から辞めなくてもいいということになり、神津島村駐在に戻りました。それから昭和二十三年に新島本村、二十五年九月に大島支庁勤務となり妻子も大島に来て約

十年元町に住みました。

私達夫婦は義務教育しか受けていなかったもので、子供だけはなんとか大学を卒業させてやりたいと二人で話し合っていました。そして子供の教育のために東京勤務を希望して、昭和三十六年四月に東京都主税局の葛飾税務事務所に転勤することになりました。千葉県ふなばしの船橋市に土地を購入し家を建てました。津田沼つだぬまの駅から歩いて十五分位の所ですが、当時は今と全然違って周りは畑だらけで、風が吹くと新築の家のまわり全部に畑の砂がどんどん入ってきて、女房が一日に三々四回掃除していました。でも住めば都みやこで、住みやすい所でもありました。

お陰様で夫婦で願っていたとおり、長女は都立商科短大を卒業して三菱商事に就職し、長男は東洋大学を卒業して千葉経済大学付属高等学校に就職、次男は一橋大学を卒業して丸紅に就職しています。自分一人の給料で家族を養い、子供三人を大学に行かせるのは結構大変で生

活もけして楽な方ではありませんでしたが、昭和五十九年三月の定年退職まで二十三年間東京で勤務し、四月三日に神津島へ帰って来ました。

東京勤務の時代、私の趣味は旅行と登山でした。山に登りたいと思ったきっかけは、東京に行ってから葛飾・江戸川・中央・江東・文京・中央と三年から五年の期間で移動になっていましたが、昭和四十四年の十二月に江戸川から移動した中央都税事務所で税金関係の仕事をしている時に、課の中で同じような年配の人達が、山登りをやっていると行って色々な話をするので、『へえ、こんな連中が山に行けるのか、それなら俺だって行けるよなあ』と思って、それから「俺も仲間に入れてくれよ」と頼んで一緒に行くようになったのが始まりです。

『東京都体育会山岳部』の会員になり、昭和四十七年十月に鳥海山・十和田湖・八幡平の旅に参加したのが最初でした。四十歳から五十五歳くらいの同じ年配の人達とグループで、東京都体育会の妙高山・火打山の登山大会や越後、苗場山、尾瀬のハイキングにも参加しました。山ばかりでなく、友達と二人で清里高原・野辺山・小沢の旅をしたり、妻と仙台松島、金華山を旅行したりもしました。何処も楽しく素晴らしい景勝地でしたが、中でも昭和五十年の七月三十一日から八月一日にかけて参加した富士登山の時、富士山の山頂で食べたスイカの一切れが、何とも言えず美味かったのは忘れることができません。

昭和四十七年から五十年の四年間、『体育会山岳部』の指導を受けて山登りも多少慣れてきて、おかげ様で高山病になることもなかったのだ、五十一年から一人で自由に歩いてみたいと考えて、六月始めから七月の出発まで毎朝六時に起きて一時間位走りこみをして訓練しました。

一人歩きで登るようになってからは、だいたい七月の二十日から一週

富士山頂にて 後方が私



間ぐらいの間で天候が良い処を見て行くようにしていました。毎年、新宿発の夜行列車で目的地に行き、バスで登山口に着いてから休憩を取り出発、一日八時間歩いて山小屋に泊まり、翌朝出発して次の目的地に宿泊する。という感じで五十一年から五十四年まで富士山、槍ヶ岳・穂高、立山剣岳、尾瀬ヶ原、南アルプスと山歩きを楽しんできました。アルプスは北と中央と南があつて、北と南は行けたのですが、中央アルプスは残念ながら行けませんでした。五十一年に行った槍ヶ岳・南岳・北

穂高・前穂高の縦走^{じゆうそう}の時は恐い思いもしました。人と人がやつとすれ違えるような狭い道も、風が吹いたら這^はって進まなければならなくて、槍ヶ岳を出て北穂高に向かう途中は、十三キロのリュックを背負って、夏でも五十センチ位の高さに積もった雪道をよじ登る時の辛さ^{つら}と、その先の稜^{りようせん}線を歩く道幅が狭くて『ここから落ちたら・・・』と必死の思いで歩き、何とか北穂高の山小屋に到着して泊まりました。そして翌日は山小屋を出発して前穂高を下山する時の急斜面でも怖い思いをして、やつとのことで帰ることが出来ました。

剣岳を登る時は二つ上の人と二人で行きましたが、それこそ下を見ると、落っこつたら帰って来られないような断崖の細い道を、ひかれた鎖^{くさり}を伝わりながら通つたりしました。恐くて本当に下を見ることができませんでした。物すぐきつかったです。

冬山を登山する人の中には遭難した人も多いらしくて、途中の道路にお地藏さんがたくさんあります。こんな処で遭難したのかなと、夏山

では考えられない場所にあったりします。下山する時とかの、夕刻だつたり陽気ようきが暗くなったりすると、淋さみしっぽいような気にも

なります。特にお化けが出て来るといふことはなかったですが。(笑)
「一人で登って面白いんですか？山登りつてのは楽しいもんなんですか？」と聞かれることがありますが、結局、登る時は一人で重いリュックを背負っているので結構きついものですが、山小屋に入ってしまうと同じような仲間が何十人も居ますから、食事をしたり休んだりする間に何とはなく会話が始まります。輪の中に入って話す間に大概たいがい「向う方向が同じなら一緒に行きましょう」ということになって、淋しいことはないし、結構楽しいもんです。

また神津島の天上山は天上山なりの良さがありますが、二千メートル、三千メートル級の山はまた別物で良さが全然違います。登った時の、高い処からの一面のもののすごい景色というのは、特に晴れた日なんかは何とも言えない眺ながめです。あとはまあ途中歩きながらの高山植



物もけっこう鑑賞できますし、『ライチョウ』が出て来るかどうか期待しながら歩いていると何回か会うことができます。他には特に楽しみというのはないんですが、結局、頂上せいふくを征服した時の達成感せいふくというか征服感で見

眺望を味わいたくて、皆、山登りに行くんです。下した(下界)では味わえない良さがあって、その良さをまた観たくなるんですね。こうやって九十歳を目前にしても心身共に元気でいられるのは、山登りをして体も鍛えられ、素晴らしい景色を観ることで心の滋養にもな

ったからかも知れません。

昭和五十九年四月に神津へ帰り、三年間神津島の大島支庁出張所で嘱託員しよくたくいんとして月に十五日間勤務しながら、税理士試験の勉強をしました。六十一年に試験に合格して十二月から『税理士』として開業し、平成四年五月に『東京都行政書士ぎょうせいしよし』に登録し、平成十六年の三月十五日に税理士を廃業するまで続けました。

神津へ戻って来てから三十年あまりの間に農業委員会の会長、農業協同組合の組合長、濤響寺檀家総代役員、人権擁護委員等じんけんようごを務めさせて頂き、平成十四年には法務大臣からの感謝状も授与されました。

そんな中、税理士をしながら、昭和六十二年から農業も始めようと思ひ、『大沼』の畑を開墾あらこ（あらこ）して墓の花づくりをして、『友丸』の浜川義春さんの指導を受けながら『宮原』にハウス二棟を建ててガーベラ、オーニソグラムの栽培を始めて農協に出荷していました。

当時、神津ではキヌサヤが一番の農業の収入源でしたが、それが何十



妻との二人旅

年と続くうちに段々と連作障害が出始めて、キヌサヤも作るのは限界だから、次に神津の農業として成功させていくには何がいいかと考えて、変ったものをやってみようと思つて花を始めました。しかし花卉かき類は結局神津の農業としては生活していくだけの収益は上げられませんでした。妻が平成六年二月に亡くなつて、一人で花の栽培は続けられないので止めました。そして七年からは大沼のハウス二棟でアシタバ栽培を始めて、翌年から農協に出荷していました。アシタバ

は『丸源』の関正一さんが農協の組合長をしていた時に自分でも作りながら推すい奨しょうしていて、八丈島から種を買って皆に分けてということをしていました。そして私が組合長になってからアシタバを何とか成功させようということで、役場にお願ねがいに行つて村の補助と農協の補助を得て八丈から数トンもの種を購か入いして、生産者に4分の一の値段で購か入いしてもらい、アシタバ生産を薦すすめていきました。レザーファンも『才さい周しゅう』の浜川昭一さんが八丈島から持って来て始めて、神津に広めましたが、アシタバにしてもレザーファンにしても今は作る人も高齢化して、後継者も少なくて容易ではありません。今自分でブドウとイチジクを試しに育てていますが、神津島で専業農家として生活しているのは本当に大変な事だと思います。

妻が亡くなり、平成九年から七年間かけて四国八十八ヶ所を巡礼しました。その他にも高野山、西国三十三ヶ所、秩父三十四ヶ寺、坂東三十三ヶ寺、恐山と十年かけて巡礼の旅をしてきました。



四国八十八ヶ所巡礼

妻が元気な時、夫婦一緒に旅行したのは三回くらいでしょうが、私は旅行が好きで年に二回くらいは旅行していました。女房は私がせっかちなものだから、一緒に行くのは嫌だと言つてあまり一緒には行つてくれませんでした。平成三年に奈良と京都に行き、四日間

タクシーを雇いあげて参拝・観光してきました。これが二人の最後の旅行でした。

妻芳子が亡くなって、平成二十六年二月二十八日で満二十年になり



と最後の旅行(金閣寺)

ますが、ここまで
元気で来られたの
は兄弟（清次の
妹、喜代志夫
妻）、勝造の子供
（央子、邦江、勝
正）らの暖かい
支援のおかげで
す。日々感謝して
おります。

また『コスモス

の会』のお母さん等の『給食サービス』を毎月いただき感謝しております。これからも地域の人々にお世話になりながら生きていきたいと願っています。

本誌第二十集が出版される頃は九十歳になっていることと思います
が、がんばります！

（本人原稿及び聞き書き）

思ひ出

清水 滝一

昭和三十六年元旦 求ム

一月 元旦

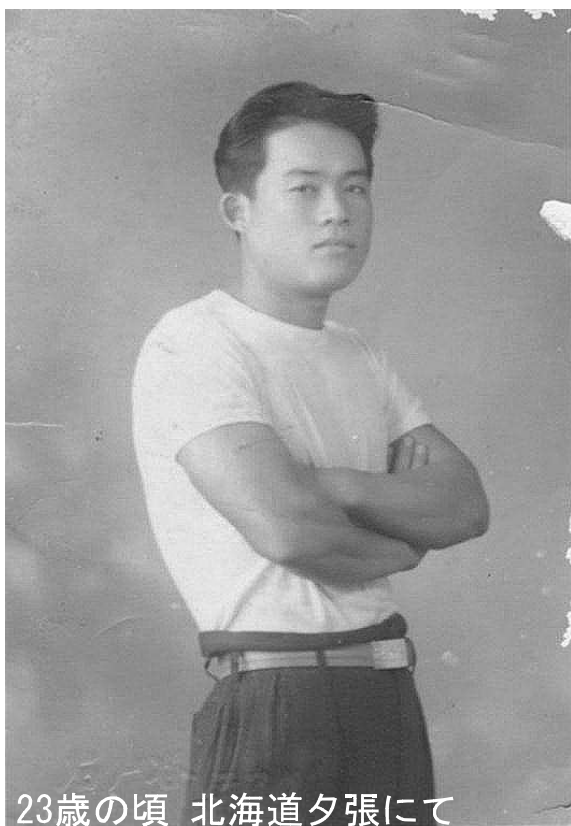
年頭にあたり、新たな決意のもとに日記お書き始める。

元旦 風弱く、うつらうつらと なす事もなく一日お 送る。

晴れ 時々曇りの天気

二日 大毘丸の乗り初めに行き、あちこちで呑み 五時頃かへる。

三日 大工組合の会合あり けれども(となり組長のかいせんの為開



23歳の頃 北海道夕張にて

ひょうの立会いに行く石野
田修一とうせん)

午前十二時組合に行く。今
年より七百元の手間となる
六時頃ベ会 風弱く 晴
良い正月である。

四日 仕事始め 表雨戸

鴨居^{かもい}木取り 四人共元気

仕事して五時半終わる。風つよく(南西)

五日 今日 昌義休み 表ランマ鴨居木取り

明日より 取付始める予定 風弱く 曇り

六日 今日も昌義休み 表鴨居取付終わる。西風強く寒い一日であった。

七日 晴れ 西風昨日と同じ様な天気である。
昌義 今日から出る。今日 表ランマ鴨居取付終わる。
留夫 でん気かなあつらいるらしい 俺もほしいけども
らいねんにする。

八日 四人そろって今日も元気に過ごす
今日から大相撲 始まり俺たちも 『大助』通いが大変だ
風弱く 晴れ

九日 曇り

今日 表雨戸袋取付 終わり
久しぶりに汽船が来る。一ヶ月ぐらい来なかったと思ふ

十日 エン甲板けづり始める（小雨）

十一日 晴れ 西の風
エン甲張り 終わり 今日引越した
ごちそうになり 七時に帰宅 子ども達は ねて居る
早く来る様にしないと思う

十二日 西の風 寒い日である 今日ほしのいたみはげしくつらい一日であった
エンコはりおわり あみぐら材木取り

十三日 西の風 弱 晴

今日は母さんが炭山に行き、子供達お見ながら仕事おする
早く子供等が大きくなつて いそ遊びでもして暮らしたい

十四日 今日西の風 弱 内羽目 張り

十五日 今日勘定日である 十二日分 七千八百円取ってくる
正月より七百円に成ったけれども 勝吾郎 終わりまで
六百五十円で仕事する事にする 西の風弱く 晴れ

十六日 晴れ 北西の風

今日はやぶ入り 一日子供達と暮らす。

俺の親たちのめい福お 祈る

十七日 西の風 晴れ

今日は満エの仕事 釜戸の仕事

十八日 昨日につづき 今日満エの仕事 西の風 晴れ

十九日 (旧四日) 今日から勝吾郎の仕事に行く

夜八時 長崎にかすに行く 十一時三十分かすよく入る。
八十四出る 家へ来たのは三時(西の風 後北西弱)

二十日 北西の風 弱 勝吾郎仕事

二十一日 西よりの風 勝吾の仕事 今日表ランマ組み込み始
める

二十二日 西の風 今日で大相撲初場所 千秋楽 大関柏戸 優勝
明日から楽しみがなくなった。 ランマはめ込み

仕事しまつて、家に来ると食べる前に一パイ呑みたくな
って仕様がなない 呑まない

二十三日 勝吾 仕事 何事もなく一日過ごす

二十四日 今日は源八の仕事 下目張り三人で行く

二十五日 勝吾仕事に行く 一人

二十六日 北西の風 今日是一日寒い日である

二十七日 北ヨリの風 晴れ

今日から昌義 藤八の仕事に行く（ぶた小屋）
とめさんは佐吉の仕事終わり

二十八日 西よりの風 晴れ 何事もなく一日仕事する 今日

一パイごちそうになつてくる

二十九日 西よりの風 午後から小雨 今日は何事もなく 一人

久助建て前



明日の朝から六時前に
家お出るように
今日はヘリコプターが
成エの子供お連れに
来る

三十日 南西の風
弱 一人

三十一日 西よりの風

今日は勘定日 七千八百円 受け取る

二月一日

今日は満エの仕事 西ヨリの風 弱

二日

勝吾郎 仕事

今日は市十郎父お ヘリコプターが連れに来た

可愛そうな祖母 あといく日の命か
思へば物心つき始めた頃からあのふしくれだった手で
俺の頭おなで 手お引き寒い思いもせずどうにか
一人の男としてそだててくれた恩お思えば 何事も
してやれなかった俺は本当の親不孝者ではなからうか
祖母の枕元へすはると先立つものはただ なみだである

十九日

相変わらず 祖母はねむったままである まず二、三日は
大丈夫そうである

二十日

今日は汽船で亀兄がくる 祖母もいくらか良い方に向か
つたらしく 意識おとりもどしてくる

二十一日

今日は祖母の容体悪く 今日か明日かの命ではなからう
か 北寄りの風 小雨
午前中祖母の看病 午後 仕事
午後六時頃 祖母の容体いよいよ悪くきとく状態となり
十一時帰り うとうとしていると ふさこ呼びに来る
時 午前一時五分钟前 この日は
俺の一生を通じて忘れることのできない時である

二十二日 今日の仕事休み 祖母ののり船その他諸事に

一日お送り今夜は通夜お営み

明日はいよいよ野辺のおくりおしなくてはならない

今夜の通夜はせいだいにして 小雨時々ぱらつき

風もなく さながら祖母の涙かそれとも祖母の死を 天も

悲しむのか 人間もこの様にしてゆかれるものか

さながら眠るがごとく呼べばこたへそうな安らかな死に顔

であつた 俺もこの様に行く様 日頃心の修行しよう

二十三日 今日はいよいよ野辺の送り 何かと心せはしく

入かんの時、最後のお別れをする

これが最後か これが見納めか 思い出は出て来る

なみだおさえがたく祖母よ 安らかに眠れと祈るのみ

午後三時 いよいよ出棺

にぎやかに野辺の送りをすませ 五時頃帰る

二十四日 今日はお墓なおし ちちぶに行き

雑用に追われ一日すごす

二十五日 小雨 北よりの風

今日から仕事行き とめさんも来て四人で仕事する

二十六日 昨日と同じく小雨 北よりの風 今日も四人で仕事する

二十七日 今日佐エ門の屋根ふき手間

祖母の四十九日の法要を営む

二十八日 今日仕事 八分

三月一日

今日は仕事終わって かすに行く
「伝兵エ」が駄目で「おれたち」で四十五枚ばかりでる

二日

仕事 一人

三日

今日も一人 勘定には ならない

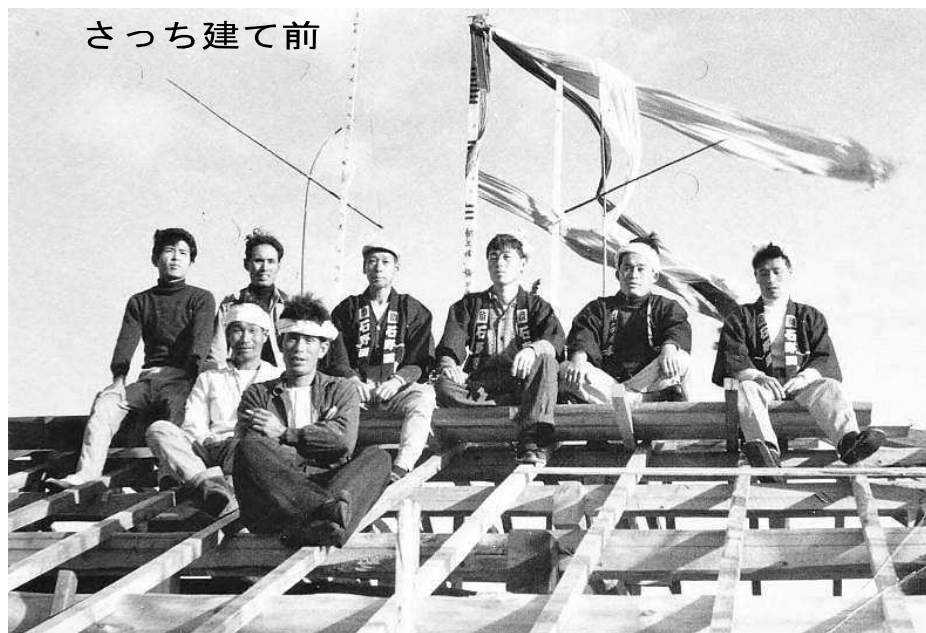
四日

今日も何事もなく一日仕事

北ヨリの風

五日

今日で仕事終わり



さっち建て前

六日

今日は亀次郎へ杉山はら
いに母ちゃんと二人で
久しぶりで 行く

七日

今日から吉三の仕事三人で

八日

今日は昌 もちつきで休み
二人

九日

今日は西よりの風 吉三の
仕事
金吾よりうなぎがつう一本
買ってくる 百五十円

十日 今日は（旧二十四日で休み）半内家の仕事手間

十一日 （二十五日 休み）一日遊ぶ

十二日 吉三の仕事に行く 今日から春場所始まる （昌休み）

十三日 仕事する （昌休み）

十四日 仕事する （今日は三人 小雨）

十五日 今日 勘定 四千九百円受取り（三人で一万二千六百円）

二十三日 仕事 山田（箱さし）（八分）山田の母午後二時頃死去

三十一日 仕事 今日勘定 一万一千二百円受取

四月一日 今日には色々な事のあった一日である

午後一時半頃 長十郎の家が火事になり 現場へ行く
半焼す

三時頃仕事場へ来たら 吉三の母がたおれる
今日は半日

二日 今日外回り下目張り 吉三の母相変わらずなれど元気な
り（午後にわか雨）

三日 今日半日 下目張り 吉三の母良い方に向かう

十一日 休み 今日 体の具合悪く休み

十八日 今日 映画に行く

十九日 今日 平草 出漁す 見通しは良いもようなり

二十一日 今日 吉三丸 初出漁

二十二日 今日 伝次郎丸で 潜水機おやらないかと言って来たけど
あまり気がすすまない

二十三日 今日 初美病気のため七分

二十四日 長根により草に行き 九時に仕事に行く

二十八日 親方 今日 北海道から来る

三十日 今日 村長選挙日 松本氏 有利のもよう

五月一日 今日 お寺の屋根替えにて 一日過ごす

十九日 今日 ひよこかへる十九日目

二十日 今日 ひよこ八こかへる（九ツ）

二十一日 今日 清子 下田へ行く

二十四日 子供のため休む

六月二日

今日で 吉三終わり

三日

畑行き 道具せいり

四日

畑行き 明日より こん治へ行く予定

五日

今日より 権次郎仕事

八日

今日 佐吉 春雄 潜水機でしばらく亡くなる

九日

休み 体具合悪く

十日

今日は春雄の葬式

若くして世を去った若者のために 冥福を祈る

十三日

今日はつまりへ たかべ
つ子に行き 大漁する

十六日

滝休み 今日は天草の
口開けのため

二十日

休み 天草

二十一日

〃 〃

二十二日

休み 天草づかれ

二十九日

今日つまり 突棒に行き
かんぱ一枚突取り



40代の頃 磯にて

父と母のこと 「父の日記」

鈴木 初美（すしや）

父 清水滝一が平成二十三年三月に八十一才で亡くなり、昨年三月に三回忌も済ませました。

母（喜代子）は父が亡くなってからは気落ちしていましたが、「三回忌も済ませてほっとしたー」と言つて、不自由な体でも自宅で頑張つて生活してデイサービスも利用し始め、これからはもう少し外にも出れて生活を楽しめると思っていました。

毎日、いつでも母のもとを訪れ、訪ねれば笑顔で迎えてくれて、あれこれ指図されれば「わかつてーるよー」と言い返し、おかずを持って行けば嬉しそうにして「あれ、うんまいやなー」と喜んでくれて、と



子供達と自宅縁側で

いう生活があたりまえで、まだ、まだ、この日常が続くと思つていましたが、昨年の夏に体調を崩し、私たちが心の準備も出来ないうちに十月六日、父のもとへ旅立ってしまいました。

四十九日も過ぎ、母の荷物の中から何冊もの日記が出てきました。

手術をする前の元気な時から、平成二十五年九月まで、訪ねて来てくれた友人や私たち家族へ感謝の言葉が綴られていました。

最後の日付けが平成二十五年

九月二日で、デイサービスを利用して「懐かしい人と話も出来た、お風呂も入れてよかった。」とあり最後が「元気になりたいな―」で終わっていました。九年以上闘病してきた母の切実な気持ちだったと思います。

それと一緒に、父の昭和三十六年の日記が出てきました。五十三年前、私たち兄妹が六才、四才、二才の時です。両親三十一才の当時の生活の苦労が伺えます。結婚当初は借家で、文助の隠居や、市平の隠居を借りたそうです。

日記は自分たちの家を持つてからの、一月〜六月までですが当時の暮らしぶりや、大工仲間達との仕事のこと、大工の日当が七百円に上がったとか、現金収入の少ない当時の苦しい生活でも三人の子供を愛情をもって育ててくれたこと。

仕事が終わってから夜中にかけて『かす』に行くなど、休むことなく働いていたのだと思います。『かす』とは小さな魚のようです。



「そうしなければ、生活出来なかった。」とはよく言っていました。テレビのある家はまだ少なくて、大相撲を見せてもらいに近所の『大助』へ通っていたこともわかります。又、時化つづきで一ヶ月くらい船が来なかったもあり、当時の暮らしの大変さが

が想像できます。

母は、平成十八年、七十七才の時お年寄り作文集に『思い出』という文章を聞き書きで寄せています。父も「おいの人生は波瀾万丈だっ



70代の頃

た、ドラマになるよ」とふざけていっていたこともありました。夜中から朝方にかけて『より草』や『かす』にいつて不思議な体験をした話は聞いていましたが、熱心にも聞いていなくて作文集に載せてほしいと頼んでみましたが、「いいやー」と言われてそのままでした。今となつては聞いておけば良かったと後悔です。

いつまでも親は元気なものと思つて、後でもいいや、後で聞けばいい、今は忙しいから後でやつてあげようとしていたことがたくさんありますが、今となつては叶いません。

本当に言い尽くされている言葉ですが、亡くしてその大事さ、親の有り難さを、今更感じています。

今は、迎えに来た父とケンカをしながらも楽しく過ごしていて、先に逝つた兄姉や 懐かしい人達に会えて昔話に花を咲かせていると思います。

尚、日記の中でカナ遣いや、読み取れない字、意味のつながらない所も書いてある通りに、またどうしても解らないところは空欄にしました。

また屋号、人名など実名が出てきますが、50年以上も前のことです。でそのまま掲載しましたが、ご容赦下さい。

あとがき

平成七年から発行してきた『神津島のお年より作文集』も今回で第二十集を発行することが出来ました。収められたお年寄りの人数は延べ一〇七名になります。自筆されお持ちいただいた方々、こちらの問いかけに、昔を思い出しながら長時間の録音にご協力頂いた方々、掲載される写真を探し出し、収録にも協力して頂いたご家族の方々、また関係者の方々に改めてお礼を申し上げます。

作文集も二十集を数えると『関東大震災』『戦争』『疎開』等の神津島の昔の歴史を語れる人が、もうほとんどいなくなってきました。今回の石野田起基さんが九十歳で、戦争に招集された最後の組です。なかなか語れる人も少なくなってきましたので、二十集ということ区切りを付けて、これからは毎年ではなく原稿の集まった時点での発行ということでご理解を頂きたいと思えます。

平成二十六年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第20集
発行 平成26年3月
神津島村社会福祉協議会
TEL 04992-8-0819